

『紅月夜』

著作 a s h

この作品は『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）を元にした創作です。

俺が千鶴さんと一つになった夜から、すでに一週間以上が過ぎていた。

あの夜、エルクウとしての力に目覚めた俺は、もう元の生活には戻らないと心に決めてマンシオンを引き払い、ここ柏木家に本格的に居を構える事となった。

千鶴さんを始めとして、みんなは家族が増える事を喜んでくれて、俺を本当の家族として受け入れてくれた。

そんな平凡ながら幸せな、とある朝の事だ。

「千鶴さん、今日は遅いの？」

俺が聞くと、千鶴さんは微笑みながら答えてくれた。

「いいえ、今日は何にもありませんから、早い時間に帰れると思います」

「そう、じゃ今日は俺も何もしないで、家で待ってるよ」

まだ夏休みの大学をそのままに、相変わらず暇な時間を持て余していた。

別段する事もある訳じゃないし、それこそ様には「贅沢な御身分だな」なんて言われる。

「耕一さんも、ぼちぼち働く事を考えたらどうですか？」

「えっ、働くって、まさか千鶴さんの下で？」

「いや…ですか？ でもいつまでもそうしている訳にも…」

この辺の発想はさすがに「お姉さん」だ。

「そりゃそうだけど、俺はまだ大学生だしね」

苦笑しながら俺がそう言うと、千鶴さんも笑いながら言った。

「でも、その大学も辞めるつもりなんでしよう？」

それはそうだ。こちらに居を構えた以上は、少なくとも今の大学には通えない。それを踏まえた上で、俺もどうしようか決め兼ねているところだった。

「だったら、早いうちに鶴来屋グループの後継者としての勉強をしておいてもらった方が、わたしとしては嬉しいんですけど…」

千鶴さんはそう言うと、ポツと頬を赤らめて、うつむいてしまった。

鶴来屋の後継者…。この場合は二通りの解釈が出来る。

まず一つは俺も「柏木」だと言う事。直系の男子がいない以上、俺が継いでも文句はな
いかも知れない。

もう一つは…千鶴さんが頬を赤らめた理由。千鶴さんの婿ともなれば、これ以上の「正
統な跡継ぎ」はいない。だけど、俺にはそんな事業家が向いてると思えない。

確かに、千鶴さんをずっと守ってやりたいと思う。でも、それには鶴来屋の後継者とか、
そんなものは関係ない。むしろ、そんな事になれば、自分の自由が効かない分だけ彼女の
そばにいてやれないかも知れない。

「俺はずっと千鶴さんのそばにいて、千鶴さんを守って行きたい。ただ、それだけしか

い男だよ。鶴来屋の事なんて、どうでもいいんだ」

俺が本心そのままを打ち明けると、千鶴さんは一層照れた様子だ。

「そ、そんな……嬉しいけど、困ります。耕一さんには耕一さんの人生をちゃんと歩んでもらわないと、叔父様に会わせる顔がありません」

千鶴さんらしい、まじめな答えだ。

「親父だって、そんな体面とかにこだわらずに、『好きな女性を守ってやれ』ぐらいの事は言ってくれるさ」

親父。

俺とお袋に深い愛情を注いでくれた親父。

俺の事を思うがゆえに、俺とお袋から離れて、一人で苦しんでいた親父。

「……そうですね。叔父様ならそう言ってくれるかも知れませんね」

千鶴さんは少し遠い目をして、微笑んでいる。まるで、親父みたいにな……。

俺は一瞬涙が出そうになったのを何とか堪えて、千鶴さんに向かって言った。

「でしょ？ だから、俺はこのままでいいんだ。千鶴さんさえ……幸せならね」

「耕一さん……」

良くあるドラマでは、このまま二人がお互いを見つめ合ってキスへ……と言うところだろう。しかし、それを邪魔した奴がいた。

「なぐにやっつてんだよ、この暇人っ！ 千鶴姉も千鶴姉だよ、玄関で朝っぱらからいちゃついてんじゃないよ！ あゝ、秋だと言うのに熱いねえ〜」

「あ、梓！ あなたまだいたの……」

『紅月夜』

「いや悪い？ そうだよねえ、せっかくのラブシーンを邪魔しちゃったんだから、怒るのも無理ないか…」

すっかり開き直って悪ぶれる梓。そんな梓に対して、どう怒ったらいいのか分からない様子の千鶴さん。この辺は相変わらず梓の方が上手だ。だが、二人の様子を交互に眺めているだけではどうしようもないので、千鶴さんに加勢する事にした。

「梓、お前こんなゆっくりしていいのかよ？」

「へいへい、あたしが悪うございました。アツイお二人の仲を裂くような事なんかしてるほど暇じゃありませんですよーだ」

ことごとく口の減らない奴だ。だが、珍しくと言うのか、梓はそれ以上の口答えをせず、さっさと玄関から出て行った。

「まったく、あの子ったら…」

そんな梓を見送りながら、千鶴さんは少し怒っているような、笑っているような表情をしていた。

そして俺は（朝のキスが出来なかったのが少し残念だったが）、今日は早く帰ってくると言った千鶴さんの言葉をかみ締めながら、千鶴さんを見送るのだった。

明日は千鶴さんも休みの筈だ。と、なれば、今夜あたりは…と、我ながらしようもない事を考えながら、昼間の時間が過ぎて行った。

どれくらい時間が過ぎたろうか。一日何もする事がないと言うのも、時間感覚を麻痺させるもだったのだと、改めて認識してしまう。

「耕一お兄ちゃん、ちょっとだらしなないよ」と、初音ちゃんにまで言われる始末である。

『紅月夜』

もつとも、初音ちゃんはそんな俺を見てるのも嬉しいらしく、「耕一お兄ちゃんが、本当のお兄ちゃんになってくれるんだよね?」とか言つて、前よりも一層俺になつて来る。

梓は以前と変わりなく、あの乱暴者の梓のままだ。楓ちゃんは……前よりも少しよそよそしくなつたと言うか、前にも増して俺と話す事がなくなつた。俺としては複雑な心境だ。まあ、楓ちゃんともそのうち自然に馴染んでくるだろうけど。

そして、その日の夜。

千鶴さんは朝言つてた通り、早くに帰つてきた。もつとも、早いと言ってもようやく夕食に間に合うかと言う程度だ。

「へええ、今日は手間がかからずにすみそうだね」

夕食の支度をし終えた梓が、千鶴さんの姿を見て言つた。

「ごめんね、梓。もうちょっと早く終れば、夕食の手伝いも出来るんだけど」

食卓についた千鶴さんがそう言うと、梓は手を振りながら答える。

「ははっ、千鶴姉に手伝ってもらつたら、いつまでたつても夕食にはなんないよ」

「そ、そんな事言わなくてもいいじゃないの……」

「千鶴姉に手伝ってもらうくらいなら、タマにでもお願いするさ」

おおかた「猫の手を借りる」とでも言いたいのだろう。いつもながら梓の言葉はきついで。「そこまで言わなくても……」

相変わらず千鶴さんの旗色が悪い。確かに家事全般に関しては、この家では梓の右に出る者はいない。それを承知の上で言つてるのだから、梓もひどい奴だ。

『紅月夜』

「梓お姉ちゃん、もうやめようよ。せつかくみんなが揃つての夕食なんだからさ、楽しく食べようよ」

初音ちゃんである。うんうん、さすがに姉思いのいい子だ。

「みんなと言えば、楓がないけど？」

食卓を見回して千鶴さんが尋ねると、梓が答えた。

「ああ、あの子は今日は調子が悪いんだってさ。だから、後で消化のいいもんでも持つてってやるよ」

「そう、それじゃ梓、お願いするわね…」

千鶴さんはしゅんとして、食卓へと視線を落としてしまった。

まったく、どうして梓はこう気が利かないんだろうか。

…もつとも、千鶴さんが何かしようものなら、一騒動ではすまないのも事実なのだが…。ふつと、俺は千鶴さんの「きのこリゾット」を思い出して、ぞっ

としてしまった。今もってあれが夢なのか、現実にあった事なのかさえ思い出せない……。あれは本当にあった事なのだろうか……。もしかしたら、自分は夢を見てるだけなのかも知れない。そして、今も……

「…耕一さん？」

はっ！

いかんいかん、つい入り込んでしまった。

俺が声のした方を向くと、そこには心配そうにしている千鶴さんの顔があった。

「あの、どうかしたんですか？」

『紅月夜』

相変わらず丁寧な物言いは変わらない。

「どうせ、スケベな事でも考えてたんだろ？」

フンと言わんばかりに、梓が横からしゃしゃり出る。

「食事中にそんな事考えるかって！」

「どーだかねえ？ ほら、食欲と性欲は本能って言うじゃない？」

「せ、性欲って…」

初音ちゃんが少し頬を赤らめて、梓の言葉に反応する。この初心なところが初音ちゃんらしくていいなと思ったりする。

「へっ、そんな事を言う奴の方がよっぽどスケベだな、梓」

俺がそう切り返すと、梓はキッと俺を睨みつけてきた。

「へええ、耕一、あんた。いい度胸してるじゃないのっ！」

「当たり前だ。伊達にエルクウの血を引いてないからな」

俺も負けてはいられない。以前の俺なら、梓の迫力に負けてるところだが、今は違う。

エルクウとしての力なら、間違いなく梓よりも上の筈だ。

梓もそれを知ってるのだが、普段のこうしたケンカは絶えた事がない。まあ梓がおとなしくなったら、それはそれで恐いものがあるだろうが。

「…試してみる？」

梓が低くつぶやく。

まずい！ 梓の奴は本気になりかかっているらしく、梓の背中から気が立ち込めてるのが分かる。

『紅月夜』

まったく、こんな些細なケンカに力を使おうとするなんて、修行の足りん証拠に違いない。これだから、梓は……などのんきな事を考えているうちに、梓の気が高まりつつある。

この場で、そう言った力を使えないのは初音ちゃんだ。それに、梓の目的は俺なんだから、初音ちゃんを守りつつ、梓を牽制する事は出来るだろう。俺は初音ちゃんの位置を確認して、俺も梓の気の高まりに合わせるように、徐々に力を出す準備をする。

梓の方もぼちぼちいいらしい。さっきから、俺を睨みつけてる腫が、梓ではなくエルクウのものになっている。

まさに一触即発状態だった。

だが…

「梓っ！ 耕一さん！ 二人ともやめなさい！」

千鶴さんの一喝が居間に響いたと同時に、梓の気が急速に萎えてしまった。

そして、俺もだ。

気付くと、千鶴さんの目が…エルクウいや、「鬼」の目になっていた……。

「二人とも、つまらない事でケンカはしないでちょうだい…」

口調はいつもと変わらないようにも思える。が、明らかに怒っている。

「ち、千鶴姉…、ごめん……」

何とあの梓が素直に謝っているではないか！

「耕一さんは？」

千鶴さんはちらつと俺を見ただけだった。だが、俺は「ぎらりと睨まれた」ような気が

『紅月夜』

してならない。

「は、はいはい、軽率でした、ごめんなさいっ！」

早口をつけて出てきたのは、そんな言葉だった。

「そう、分かってくれたんですね。それじゃ、食事を続けましょ」

にっこりと笑い、箸をとる千鶴さん。ぎこちなくそれに合わせる梓。食卓は異様な雰囲気
に支配されていた…。

しばらくの沈黙を経て、千鶴さんが梓に話し掛けた。

「ああ、そうだ、梓。今日あたり来るかも知れないから、お願いね」

それを受けた梓は、何やらしぶい表情で答える。

「ええっつ、何であたしがあ？ 今回は耕一がいるんだから、耕一に付き合ってもらえば
いいじゃないの」

突然俺に振られて、俺はどうしたらいいのか分からない。とりあえず梓と千鶴さんを交
互に見ては、二人の反応を待っているだけだ。

「えっ、耕一さんには…」

何やら恥ずかしそうにする千鶴さん。

「何言ってるのさ、耕一とは深い仲になっちゃってるんでしょ？ だったら遠慮する事な
いじゃん」

「深い仲って…」

千鶴さんの顔が一層赤くなる。

一体何なのだろうか？ 今日あたり来るかも知れないって、何の事だろう？ 恥ずかし

そうにしてる千鶴さんの様子から察すると、あまり俺には知られたくない事のようにだけ
ど…。

「毎度毎度、面倒を見るあたしの身にもなってよ」

「それは悪いと思ってるけど…」

「あたしに出来るんだから、耕一にも出来る事でしょ？ あとは千鶴姉の気持ち次第なん
だけど」

うーん、話がさっぱり分らない。

「…初音ちゃん、あの二人の言ってる事って分かる？」

俺がこっそり初音ちゃんに聞くと、初音ちゃんは困ったような顔をした。

「うーんとね、わたしには分かるんだけど、耕一お兄ちゃんには分からないかもね。それ
に千鶴お姉ちゃんもあんまり話したくはないんじゃないかな？」

要するに「知ってるけど教えられないよ」と言ってる訳だが、そこに悪意が微塵も感じ
られないのはさすが初音ちゃんだな。

いやいや、感心してる場合じゃなくて、この場面をどうしたらいいんだ？

「とりあえず一緒にいてもらえばいいだけなんだからさ、そんなに恥ずかしがる事ないだ
ろ？」

「でも…、でもでも……」

「あー、煮え切らないねえ、千鶴姉はっ！ とにかくあたしやもう面倒は見たくないんだ。
自分でどうにかしてよね」

「あ、梓っ！」

…俺の出る幕などないうちに、二人の話は決着がついたらしい。それにしても、一体何の事だろう？

俺が何気なく千鶴さんを見つめていると、ひょいと視線が合ってしまった。と同時に、千鶴さんが視線をすつとずらす。そして、ちよつと横を向いたまま

「あのう…、耕一さん…、後で説明しますから………」

と言った後、食事を終えるまで何も言わなかった。

食事をすませた後、千鶴さんは書類の整理とか言つて自室に行つてしまい、梓は後片付けをした後、楓ちゃんに何か作つてららしい。

後で話しますなんて言つておいて、千鶴さんからは一向に声が掛からない。居間でしばらくテレビを見ていた俺だったが、どうも手持ちぶさただった。

「耕一お兄ちゃん、お風呂沸いたから先に入つて、千鶴お姉ちゃんが…」

そんな俺に声を掛けたのは、初音ちゃんだった。

「ん？ ああ、ありがとう、初音ちゃん」

「ねえ、耕一お兄ちゃん」

「なに？」

「あまり気にしない方がいいと思うよ、さっきの話…」

「気にしてる訳じゃないさ」

大ウソもいいところだ。さつきからそれが気になって、テレビの内容なんて全然頭に入りやしないってのに…。

「千鶴お姉ちゃんは、耕一お兄ちゃんの事が本当に好きだから、言いくいだけなんだ

よ

「好きだから？ 一体なんで？ 何でも隠さずに話してもいいんじゃない？」

「…好きだから言いにくい事や言えない事って、あるよ。わたしだって……」

初音ちゃんはうつむいて、黙ってしまった。

俺はその場の雰囲気になえられず、

「あ、俺、風呂行って来るわ。そんじゃ！」

と言っ、その場から逃げてしまった。心の中で初音ちゃんに、ごめんと謝りながら

逃げるようにして風呂場に入り、気を取り直すように大きめの湯船にゆっくりと浸かった。

うん、生き返るような気分だ。

それにしても、一体何があるんだろうか…。

梓や初音ちゃんの言いぶりからすると、千鶴さんに何か秘密めいたものがあるのは間違いない。ただ、本人があそこまで恥ずかしがるのは一体？

梓や初音ちゃんになら、知られても恥ずかしくはないが、俺だと恥ずかしい事。うゝむ、どうも不健全な想像心（スケベ心とも言う）を掻き立てられるばかりで、まともな考えがまとまりやしない。

こうして、ちよつとのぼせ気味になるまで、俺は風呂に浸かっていた。

「ふうう、涼しい…」

窓から入る涼しい秋風に、のぼせた身体が冷やされる。特に、頭が冷えて来るとあれこれと悩んでいたのが、何だか馬鹿らしく思えてきてしょうがない。

『紅月夜』

いくら俺が千鶴さんと深い仲にあつても、まだまだ他人には違いない。ずっと一緒に育ってきた梓や初音ちゃんとは比べようがないじゃないか。千鶴さんだって、そんな俺に何もかも打ち明ける必要がある訳じゃないし……。

…駄目だ、何か急に憂うつになってきたな…。

俺が風呂に入ってる間に、初音ちゃんが敷いてくれた（だろうと思う）布団にごろんと寝転がり、天井をぼんやりと眺めていると、この前の事が浮かんで来る。

あの夜。

俺がエルクウとしての力を目覚めさせた、あの夜。

千鶴さんここで……。

いかなあ、俺だって健康な青年男子に違いないのだ。そんな事を考え出したら止まりようがない。

何気なく右手が腹から下の方に伸びようとした時、障子ごしに誰かが俺を呼んだ。

「あの…耕一さん……」

千鶴さんだった。

俺は慌てて手を引っ込めて、トランクスの張り具合を確認した上で、布団を下半身にかぶせてから、返事をした。

「な、何？ 千鶴さん」

ちょっと声が上がっていたかも知れない。だが、障子ごしの千鶴さんはそんな俺の狼狽ぶりに構わずに、続ける。

「あの…食事の時に言ってた話なんですけど……」

「あ、ああ、あの話ですね」

「その……後で……」

また「後で話します」なんて展開にもなりそうな雰囲気だ。千鶴さんはどうも話にくそうにしているし、俺も無理に彼女の秘密を知りたいとは思わない。

「千鶴さんが……話したくないんなら、無理に話さなくてもいいよ」

こう言えば、千鶴さんなら「そうですか……」とか言ってくるだろうと思っていた。だが、千鶴さんの反応は俺の予想とは大きく違った。

「違うんですっ！」

言うと同時に障子をガラツと開け放ち、まっすぐに俺を見つめる千鶴さん。

その瞳にはまさに切実そのもので、とっさに取った行動といい、二重三重に俺を追いつけてくれた。

「ち、千鶴さん……落ち着いてよ……。一体何があるの？」

情けない事に、俺は及び腰になっていた。

「ご、ごめんなさい……でも、やっぱりいつかはあなたにもお願いしなくちゃとは思っていた事ですから……」

少し落ち着きを取り戻した千鶴さんは、うつむきながらも言い続ける。

「お願いしたいと言っている……その、あの……」

だが、口の方も達者になったとは言えない状態だ。よほど言いづらいらしい。

「千鶴さん……本当に無理しなくても……」

「いえ、それじゃ困るんですっ！　いつも様にばかり迷惑をかけられないし」

「迷惑って…一体何なの？」

俺のそんな質問に、千鶴さんはいよいよ覚悟を決めたらしく、俺の方をまっすぐ見て、こう言った。

「あの、今夜一晩…わたしと一緒にいてください…」

「へっ？」

ひどく間抜けな返事をしたようだが、間違いなく今の自分の表情もそのままだろう。一体、千鶴さんは何て言ったんだ？

「あの…、千鶴さん？ 今何て言いました？」

「えっ、そ、その…：…やだっ」

さっきした覚悟はもう吹き飛んでしまったらしく、千鶴さんは顔を真っ赤にしてもじもじとするばかりだ。

「今夜一緒にいてくれて言ったんだっけ？」

小さくコクンと頷く。

「一晩中？」

もう一回、さっきよりも小さい頷き。

俺が頭の中を整理しようと、ぼんやりしていると、千鶴さんは本当に小さな声で、

「そ、それじゃあ、待ってますから…：…一時間くらいしたら、わたしの部屋に来てください」

と言って、その場からしらずと去って行った。

障子が閉められた後も、俺はしばらくぼんやりとしていた。

「これは…もしかして『夜這いのお誘い』なのでは……」

自分が口にした言葉で、さらに俺の妄想はふくらんでしまう。

千鶴さんって意外と積極的な人だったのだな、と勝手に解釈して、俺は妄想にふけって行った…。

あれから小一時間が過ぎた頃、俺ははやる心（と股間）を必死に押さえながら、千鶴さんの部屋へと向かった。

四姉妹の部屋が並ぶ廊下に来ると、否応なしに緊張が高まる。何せ、これからする事を他の姉妹には知られたくないが、目的の千鶴さんの部屋は一番奥にある。

千鶴さんが痺れを切らしてるかも知れない。だが、ここで軽々に動いては負けだ。今まで以上に慎重に、姉妹の部屋の前を通り過ぎて行く俺。端から見れば、さぞかし滑稽な見物だったろう。

まるで泥棒にでもなった気分、俺はようやく目的の扉までたどり着く事が出来た。意地悪なアドベンチャーゲームなら、ここで何か突発的なイベントが起きたりして、それまでの苦労を水泡に帰してしまうところだ。それで、「実はこの扉を開けるにはあるアイテムが必要だ」とか言ったりするに違いない。

俺は何故か周囲に気を配り、何も異がない事を確認した。気分はもはやゲームの主人公そのものである。

そして、やっと安心して、これから起こるであろう楽しい事を想像しながら扉のノブに手をかけた時だった。

「！！」

『紅月夜』

俺はその扉の向こう側に、何とも言えない気配を感じ取ったのだ。すぐに音楽が「見えざる敵」に変わり、緊張感を高めてくれる。

『何カギル…危険だ』

俺の中の狩猟者が盛んに俺に告げる。

おかしい。部屋には千鶴さんしかいない筈だ。そして、彼女が今その力を使う必要はない。

まさか…奴が生きていたのか？

だとすれば、奴は間違いなく真っ先に千鶴さんを狙う。いや、奴は間違いなく死んだ。

この俺が殺したのだ。

しかし、狩猟者とはそんなに簡単に倒せるものだったのだろうか？

俺の心を暗い雲がどんどん覆って行くような、そんな感じだった。俺は…

・迷ってる時間はない！ 千鶴さんを助けに行くぞ！

—— ■分岐Aに移動■

・今日は日が悪そうなので、ひとまず部屋に戻って寝る

—— ■分岐Bに移動■

俺に悩んでる時間はない。

ノブに手を掛けて、ゆっくりと回す。どうやら鍵は掛かってないらしい。

俺はわずかに開いた扉の向こうにいる何かの気配を明確に感じ取った。それは、殺意だった…。

「千鶴さん！」

俺は叫びながら、扉を開けて、部屋に入ってしまった。もちろん、こちらも力を押さえ気味に解放して、臨戦体制をとってだ。

部屋に入つてすぐに扉を閉める。相手がどんな奴か分からないが、もし廊下に出られたら、他の姉妹に危害が及ぶ恐れがあるからだ。少なくとも梓は何とかなるかも知れないが、楓ちゃんと初音ちゃんはどうしようもない。

部屋の中は暗かった。

だが、ベッドの上に何かがある事だけは、よく分かった。

「ち、千鶴さん…なの？」

声を掛けたが、それは反応しなかった。

ベッドで上体を起こして、こちらを見据えてる…千鶴さん、いや、狩猟者。

『狩レ。ソノ同族ノ女ヲ狩レ。サモナケレバ、狩ラレル』

俺の中の狩猟者が警告する。と、同時に俺の力の解放が一層進む。

いや、駄目だ！俺が全力で戦えば、千鶴さんを殺してしまう。

『紅月夜』

だが、そいつの警告通りに千鶴さんの瞳からは、優しい雰囲気など微塵も感じられない。そこにあるのは、ただの殺意だけだ。「我が行く手を遮るものには死あるのみ」と言わんばかりにだ。

追いつめられて、悩みぬいて…、俺を殺そうとした千鶴さんとも違う。

「千鶴さん、どうしちゃったの?」

無駄とは思いながらも、俺は声を掛けずにはいられなかった。そして、危険を承知でゆっくりとベッドに近付いて行った。

「ねえ、いつもの千鶴さんに戻ってよ…」

もう少しで彼女に触れる距離まで近付いた時、突然彼女が動いた。

ブンツ!

風を切る音が、俺の耳にはつきりと聞こえた。

千鶴さんの手が不意に俺の首を狙って来たのである。俺はとっさにそれをかわしたが、わずかに右頬をかすめたらしい。

間違はなく俺を殺すつもりで攻撃だった。こうなっては、俺も甘い事を言ってもらえない。

千鶴さんはすでにベッドから起きだし、俺との間合いを計っているらしい。だがその瞳はずっと俺に向けられたままだ。

「千鶴さん、ごめん!」

言い捨てると同時に、俺も力を解放して行く。姿こそ変えないものの、力は千鶴さんを上回っていると思う。ただし、俺が知ってる千鶴さんは、あの時の俺を殺そうとした千鶴さんだ。心に迷いとためらいがあったあの時と違い、それが無い今の彼女の實力はもつと

上かも知れない。

「ぐっ…」

千鶴さんが短く唸る。恐らく俺の力を本能的に察知したのだろう。そして、俺は千鶴さんが気後れして、わずかに隙が出来たのを見逃さなかった。

くっとなりに力を入れて、一気に千鶴さんの懐に飛び込む。

「っ…」

動揺し、すぐさま逃れようとする彼女を……

「えいっ！」

と、俺は上から押さえ付けた。

刹那、

「ぐっ！」

千鶴さんは思いつきり暴れ出した。押さえ付けられたら、負けるのは分かっていたろうし、自然界においてそれは即ち「死」を意味する。

野獣の如く暴れる彼女を俺は必死で押さえ付ける。無論、自分の力を出し過ぎて彼女の身体をひどく傷め付ける事のないようにだ。

だが、それは至難の技だった。

千鶴さんは俺を単なる敵として認識しておらず、俺が少しでも疲れた素振りを見せたり、力をわずかに緩めただけで、ここぞとばかりに暴れ出す。

「くうっ！ 千鶴さんっ、頼むからおとなしくしてくれよ！」

慎重な力加減は俺の疲労をかなり招いた。

『紅月夜』

ちくしょーっ！

朝はまだかっ！

だが、朝になればこの苦しみから解放されると言う保証はない。ただ、千鶴さんが目を覚ましてくれれば、いつもの彼女に戻るのではないか、そう思ったただけだ。

部屋に入ってから、どのくらいの時間がたったのだろうか？

一時間？

十分？

一分？

時計を見る余裕なんて、ありはしない。ただ、とてつもなく長い時間、俺はこうしているような気がするだけだ。

あと、どれくらい続くのだろうか？

俺が死ぬまで？

千鶴さんが死ぬまで？

いやだ…、

いやだいやだ、

いやだあっ！

絶対に千鶴さんを傷つけたりしないっ！

そうだ、たとえ俺がそれで彼女に殺されたとしても……

『紅月夜』

千鶴さんがいた。

この屋敷の縁側。春の日のような、のどかな風景に彼女は溶け込んでいた。そして、俺もそこにいた。

俺は千鶴さんに膝枕をしてもらい、優しそうに微笑む彼女の顔をただ見つめていた。ふと俺が言う。

「ずっとこうしてたいね。働けて言ってる千鶴さんには申し訳ないけどさ」
すると彼女は困ったように、

「わたしそんなにしつこく言ってみましたか？」
と俺の顔を覗き込む。

「うん、そんな事ないよ。でも、たまには困らせてみたいと思っただけ」
と俺が答えると、彼女はクスツと笑い、

「満足しましたか？」
と聞いてくる。

「うん」
短く答えて、俺はそのまま微笑む千鶴さんをただ眺めるだけ。そこには、ゆるやかに時間だけが流れている。

俺はずっとこうしていたいと、心の底から願っていた。
ずっと……

『紅月夜』

「目が覚めましたか？」

優しい声が俺の聴覚をくすぐり、瞼に光を感じて、ゆっくりと目を開ける。

あれ？

俺はまだ夢を見ているのだろうか？

さっきまで見てた縁側の風景さながらに、俺の上には千鶴さんの顔があり、枕は…彼女の太もも、いや膝枕だった。

「ち…づる…さん？」

「はい」

まだ意識がはつきりしない状態で、千鶴さんの名を呼ぶと、彼女は短く、そして、はっきりと答えてくれた。間違いない、千鶴さんだ。

「千鶴さんっ！」

「きゃっ…」

俺がいきなり身体を起こしたので、彼女が小さく声を上げた。

「あ、ごめん。でも、一体何があったんだ？もしかして、昨夜の事はみんな夢なの？」

俺は千鶴さんの方に身体全体を向き直して、正座して彼女に尋ねた。すると千鶴さんはまじめな顔で答えてくれた。

「ごめんなさい、耕一さん。もつとちゃんと話すべきだったと思いますが、昨夜の事は夢なんかじゃありません」

『紅月夜』

「それじゃ、一体何で千鶴さんはあんな風に？」

だが、俺が今回の一件の理由を聞くと、

「そ、それは……」

途端に歯切れが悪くなる千鶴さんだった。

またも沈黙が覆い被さって行く。

どうして理由を言い渋るんだろうか。いや、やっぱり言いにくい事に違いないのだから、俺も無理に追究はしない事にしよう。

そう決めた時だった。

ボタンツと、部屋の扉が乱暴に開けられた。と、同時に怒号。

「つたく！ 何やってんだよ、二人とも。起きてんならさっさと飯食えよ！」

言うまでもなく、梓が乱入してきたのだ。

「あ、梓、いきなり乱入してくるなよ……」

「乱入はないだろ？ それにしても……かなり大騒ぎしたみたいだね、耕一」

ヤレヤレと言った表情で俺を見下ろす梓。俺にはその態度がちよつとばかり気に障った。

「大騒ぎってお前、当たり前だろ？ 何であんな事になったのかさっぱり分からないけど、こっちだって真剣だったんだからな……」

「ごめんごめん、耕一。あれ？ って事はまだ千鶴姉に聞いてないんだ？」

「ああ……」

「……………」

俺がちらりと千鶴さんを見ても、相変わらずうつむいたまま、何も言ってくれない。そ

『紅月夜』

ここに、梓が短く告げた。

「アレだよ、アレ」

「アレ？ 何だそりゃ？」

俺には梓が突然言った言葉の意味がさっぱり分からなかった。

「鈍いねえ、耕一は……。んじゃ、もつとはつきり言ってるよ」

「あ、梓！」

梓の容赦ない展開に、千鶴さんは声を上げたが、梓は全然構わずに続けた。

「生理だよ、せ・い・り」

「生理って…、それがどういう関係……」

梓の答を聞いてなお、ぴんと来ない。だが、そこへ突如千鶴さんが喋り出した。梓に言われてしまつて、本当に諦めたようだ。

「あの、わたし…その…せ、生理の始まる日に…おかしくなっちゃうんです」

「え？」

「千鶴姉はね、生理の初日の夜に、狩猟者の力を抑えられなくなるんだよ。で今まではあ
たしがそれを止めてたつてワケなの」

「え？ それじゃ…」

「まあ、暴れると言つても、あたしなら押さえつけられる程度だし、ほんの小一時間くら
いで収まつて、こつちの苦勞も知らずにスースー眠りこけちゃうんだから、大した事はな
いんだけど」

「おーい、それじゃあよお……」

「ま、あたしにとってはいい運動になるかなって程度だけどさ」

「…俺の悲壮な決意は一体何だったんだ……」

呆然としてる俺に、千鶴さんは恥はずかしくそうにしながら、

「でも、耕一さんはわたしを守ってくれました……。梓なら本気でもお互いの差があまりないんですが、耕一さんとわたしでは力の差があります。もし耕一さんが本気を出したら……」

そうだ、俺はそれだけは絶対にやらなかった。

「でも、耕一さんになら…わたし、殺されてもいいなんて思ってたんです」

「冗談じゃないよっ、何で俺が千鶴さんを殺さなきゃならないのさ！」

「耕一さん…」

「そりゃ、今回は訳が分かんなかったから、こつちも緊張しちゃったけど、事情さえ飲み込めた以上は、ちゃんと俺が止めてやるって。もちろん千鶴さんを傷つけないようにね」

「でも…」

そう言いながら、千鶴さんは手を伸ばして、そーっと俺の頬に触れる。そう言えば、昨夜千鶴さんの攻撃をかわした時に、かすったっけ。

「大丈夫だよ、千鶴さん。こんなの傷のうちに入んないって」

「そーよ、千鶴姉はいつも大袈裟に考えて、物事をややこしくするんだから」

「ご、ごめんさい」

「今回だって、耕一にきちんと事情を説明しておけば、そんな深刻にならなかつたんじゃないか。おかげであたしも心配で寝られなかつたんだからね」

ん？ 梓の奴、心配で寝られなかったって、何だかんだ言っても、やっぱり千鶴さんの事、氣遣ってるんじゃないか。言い方は全然素直じゃないけど…。

「まあ、梓の言う事ももつともだけど、無事に済んだんだから、それでいいんじゃないか？」

「耕一：アンタって本当に能気なヤローだね」

「悪かったな」

梓のジト目を受けながら、俺はすつと立ち上がり、

「さて、と、それじゃ朝飯でも食べようよ、千鶴さん」

言いながら、千鶴さんに手を差し伸べる。

千鶴さんはわずかな逡巡の後、俺に手を預けて、微笑みながら答えた。

「はい、耕一さん」

すつかり存在を無視された梓は、

「くらく、見てられないよ、まったく…」

そう言い捨てて、部屋から先に出て行ってしまった。

千鶴さんと一緒に部屋を出る時、俺はふと湧いた疑問を彼女に尋ねてみた。

「生理の時におかしくなるのって…みんなそうなの？」

「いえ、わたしだけです。楓と初音は力そのものが出てませんから、あまり心配はないし、梓もそんな事はありません」

ちよつと不思議な気もするが、何となく納得してしまつた。と言うのも、千鶴さんは何かに付けても抑え過ぎる嫌いがあるからだ。対する梓は普段から乱暴で、あいつが何かを

『紅月夜』

我慢してゐるなんてのを見たことがない。

「…千鶴さんは抑え過ぎなんだよ」

「抑え過ぎ…ですか？」

「うん。もういい加減に柏木家とかき、鶴来屋とか…一人で背負い込まないでもいいんじゃないかな？」

「……」

「俺が何とかするよ」

「え？ それじゃあ…」

「鶴来屋を継ぐとかと言うんじゃないでさ、俺が千鶴さんの重荷を減らすように努力するから、ね？」

「耕一さん…」

廊下で見つめ合う二人。今度こそ誰にも邪魔されまいだろうな…。

俺は周囲に気を配りながら…彼女をそっと抱きしめて、唇を重ねた。

強く抱きしめれば簡単に折れてしまいそうな、そんな気がするほど華奢な千鶴さん。

俺が守ってやらなければ。俺のエルクウとしての力は、彼女を守るためだけにあると
言ってもいいのだから…。

こうして、俺の「夜這い」は惨澹たる結果に終わってしまった。もともと、そんな事を
する必要もなくなるのも近いとは思う。

ただ…、

俺は漠然とした、言いようのない不安を感じていた。

『紅月夜』

千鶴さんと結ばれて、もし、子どもが出来たら…俺はその子どもをどうするだろう？

この柏木の血は、絶つべきではないのか？

つらい目に遭う者を、これ以上増やすべきではないんじゃないか？

だとしたら、俺はどうする？

これから何をすべきだろう？

…もしかしたら、本当の鬼にならなければいけないのかも知れない。いつかは分らないが、それも遠い将来ではないかも…そんな気がした。

(了)

■あとかぎに移動■
■分岐選択に移動■

『紅月夜』

どうも今日は目がよくない気がしてならない。

俺の頭には、千鶴さんに殺されかけた時の情景と、彼女の鬼気迫るほどのあの表情が浮かんでくる…。

そうだ。夕食の時に千鶴さんにおとなしく従ったのは梓だけではない。俺もまた千鶴さんの怖さを、この身をもって知ってるのだ。

『千鶴さん、ごめん…』

心の中でそうつぶやいて、俺はひとまず自分の部屋に戻る事にした。

来る時よりも一層緊張を保ちながら、静かにその場を離れて行き、寝床に戻るとこれまでの精神的な疲れからか、すぐに眠りに入ってしまった…。

俺はある場所にいた。

そこは見覚えがある…ここ、柏木家の裏庭のようだ。

音を立てないように、静かに歩く俺。その手は…人間のものではない。

やがて俺は、窓を見つけた。どうやら、それが目的の場所であるらしく、そこに慎重に近づく。

先ほどから、この窓の内側から俺を震わせる感覚がある。同族の…俺を苦しめた女がいるのだ。

身震いが止まらない。

『紅月夜』

嬉しい。

楽しくてしょうがない。

これから起きる事を考えたら、興奮で震えが止まらない。

どれだけ苦しめて、殺そうか。考え出したら、それだけで戦慄を感じる。

心地よい感覚。まさに俺は狩猟者なのだ。

そして、今宵の獲物は…柏木千鶴、お前だ。

夢にしては妙に生々しい感覚を感じた。今、俺が見てるのは一体……。

まさか……、これは奴の意識なのか？ だとしたら千鶴さんが危ないっ！

起きなければ…。

早く起きて、こいつをどうにかしないと…。

だが、俺の意識が戻る気配は一向にないまま、奴はどんどん近づく。

俺が窓に手を掛けると、中にあの女がいた。理由は知らないが狩猟者の力をほぼ解放してようだった。

面白い。あの女が本気を出したところで、今の俺には到底及ばない。それはあの男も同じだ。だが、ある程度は楽しめなくては、狩りとしてつまらないものになってしまう。

何てこった！

こいつは本気で千鶴さんを殺す気でいやがる！

まずい、とにかく起きなければ…。

窓を蹴破り、部屋に飛び込むと同時に、柏木千鶴にまず一撃を与える。

ガシャンと窓の割れる音に続いて、俺の右手が振り下ろされる風切り音。

ボスッ！

鈍い音がする。

柏木千鶴は俺の侵入とともに、すぐさま身をかわしてベッドから飛び出していた。

くっくっくっ…

それくらいでなくては、あっさり片が付きすぎると言うものだ。

俺の右手が布団に刺さったのを見計らって、女が仕掛けてきた。だが、こいつには俺の力が分かってないらしい。

千鶴さん！ 無理だ、正面から突っ込んだって、勝てやしない！

ちくしょー、止まれ止まれっ！ 止まれええええ！

俺は必死に奴を止めようとした。そうでなければ、千鶴さんは間違いなく殺されてしまうと直感したからだ。

だが…

この女と初めて相對した時には、かなりのやり手だと感じたが、今はそうではない。以前の俺とは比べようもないほど自分が強くなっているのが分かる。

『紅月夜』

だが、駆引きも何もなく、ただ突っ込んでくるだけのような獲物では、狩りの楽しみなど得ようがないと言うものだ。不本意ではあるが、とりあえずこの女の始末を付けてしまおう。

「ずいぶんとお粗末だな」

「くうっ！」

これまで出していなかった本来の力を解放した瞬間、女はそれを感じ取ったのか低く唸った。

だが、それはもう手遅れと言うものだ。

女の動きを見切って、俺は思いっきり手を振り下ろす。

女はその動きを察知して、瞬間的に避けようとした。

それは、

まるで、

スローモーションの、

ようだった。

奴の鋭く大きな爪が、

千鶴さんの背中に、

突き刺さる……。

そして、

ほとばしる……鮮血。

俺は悪夢を見ているに違いない…。
目が覚めれば、いつもの千鶴さんが俺を起こしに来るに違いない…。

弱い。

弱すぎる。

この女の力などこの程度だったのか。

俺は手の下で倒れている女を見つめながら、とどめを刺すかどうか考えていた。何故なら、この女と戦っても俺の狩獵者としての本能は、その昂揚を収めるに至らなかつたのだ。どっちにしても、放っておけばこの女は死ぬ。いや、もしかしたら俺と同じように、生き延びてあるいは……。

俺がそのままの体勢でいると、突然扉が開いた。いや、蹴破られたと言うのが正しいか。

「千鶴姉！ 一体何騒いで…うっ、あんた誰っ！」

この女…確か柏木姉妹の…次女だったか。

「千鶴姉から離れなっ！ さもないとただじゃ済まないよ！」

勇ましいものだ。

次女も俺に真っ向から対峙しようと言うのだ。

だが、所詮この俺の敵ではない。

「くっ、このヤロー、何笑ってんだよ！」

そう言い捨てると、次女も俺に向かって来た。

なるほど、言うだけあって力はそれなりにあるらしい。

『紅月夜』

だが、冷静さを欠いて、ただ猪突猛進する相手に負けるような事はない。俺は軽く次女の突撃をかわして、すれ違いざまに一撃。それだけだった。

「うそ……」

次女はその場に崩れた。こいつも姉同様に放っておけば死ぬだろう。

後は…あの男を…殺すか？ いや、ただ殺すのは面白くない。

そうだ…。

殺すよりもっと面白い趣向をこらしてやるうではないか…。

俺を一層強くしてくれたお礼に。

死ぬよりもっとつらく苦しい目に…。

そして、何よりも俺が楽しむために…。

悪夢からいつ醒めたのか。

俺はようやく自分の体に戻って、意識を取り戻した。

だが、俺の目に映ったのは、見慣れた柏木家の客間の天井ではなく、ひどく無機質なクリーム色の天井だった。

あれ…と不思議に思っ、体を起こそうとしたが、うまく動かない。と言うか、あちこちに激痛が走っている、

一体どうしたのだろう…。

俺がとりあえず動く頭だけを動かして、周りの様子を確かめようとすると、ふと声が出た。

「おや、お目覚めかね？」

声のした方を見ると、そこには長瀬刑事が立っていた。

相変わらずだらしな性格だったが、何故か黒いネクタイをしていた。

「刑事さんがどうして？」

俺は率直に浮かんだ疑問を長瀬刑事にしてみた。

「…君は状況が良く分かってないらしいね。すると、襲われた時の事も覚えてないんだろ
うな…」

「襲われた時？ 一体何の事ですか？」

何だかいやな予感がする。

「うーむ、今日のところは君の意識が戻ったのを確認出来ただけで十分だね。調子が良くなり次第、ぼちぼち事情を聞かせていただければいいんですよ」

「…事情って、何です？」

妙に歯切れの悪い長瀬刑事に、俺はわずかな苛立ちを覚えた。

だが、それよりも重く暗いものが俺の胸中にあふれてくる。

一体どうしたと言うのだろう…。

俺が「襲われた」と言って、それ以降視線を合わせようとしないうちに長瀬刑事、そして黒ネクタイの意味するもの。

さらに…俺の状況。

俺はどうやら病院で寝てたらしい。いや、入院してたと言うのが正しい。
結論はただ一つしかなかった。

そして、それは推測でも、悲観的観測でもない、恐らくは紛れもない事実。

「他のみんなは……」

俺が小さい声で尋ねると、長瀬刑事はほんの一瞬だけ眉をひそめた。…その反応は俺の予想を肯定するだけでしかなかった。

「みんなは無事なんですか……」

それでも俺はもう一度、同じ質問を繰り返した。

「……」

長瀬刑事は無言のままだった。いくら刑事とは言え、言いたくない事だつてあると言う訳だ。無論、俺も好んで聞きたいと思う類の返事ではない。

「…そうですか。それじゃ、やっぱりあれは夢じゃなかったんだ……」

あの時、夢にしてはリアル過ぎた感覚。あれは夢ではなかったのだ。

「君もつらいとは思うんだけど、今の時点では唯一手がかりになるのは君の言葉だけなんだ。こんな事聞くのも刑事の性なんだが、何か覚えてる事は？」

長瀬刑事が申し訳なきように俺に尋ねる。

犯人について何か知らないか……だつて？

はははっ！

知らないも何も、そいつは人間じゃないんだ。エルクウと呼ばれる、狩猟種族なんだ。

あんた達人間が束になつても、かないやしない。そして…、そして、俺もその一人なんだ。

畜生ッ！

何がエルクウだ！

『紅月夜』

肝心な時にその力を發揮出来ないんじや、そんな物ただの飾りに過ぎないじゃないか！
畜生ッ！

ちくしょうッ！

ち……くしょ……おおお……。

「…今日はこれで失礼しますんで、また明日にでも、話を聞かせてくれますかかね？」

どこか似合わない丁寧な物言いの長瀬刑事。だが、俺はそんな事を気にしてる状態ではなかった。

俺の瞳からは、とめどなく涙があふれている。

悲しいから？

いいや、違う。

俺は口惜しいんだ。

誰一人として助けることが出来なかった自分の無力さが。

自分の大切な人が死んでいく様が、この手の感触として残っている事が。

俺の従姉妹達の告別式は、それから数日を経ずして厳かに催された。

地元の実力者と言う事だけあって、かなり盛大なものだったらしい。

らしいと言うのは、俺はその場になかったためだが、病院にも、まして警察に行つた訳でもない。

元々エルクウの肉体的能力からすれば、傷の治りは早く、その事を変に勘ぐられるのも嫌だったためと、これ以上長瀬刑事らを巻き込む訳にも行かない。

俺は一つの思いを胸に、ある程度体が動くようになった時点で、病院を抜け出して行ったのだ。

目的はただ一つ。

奴を殺す事。

俺からかけがえない人達を奪った、奴を殺す事。それだけだ。

それ以外の目的など、俺にはなかった。

エルクウとしての能力を持つ自分には、それ以外の道はない。

あの夜、実際に何が起こったのか、自分がどうしてこんな目になっているのか、何故か自分でも思い出せない部分があるが、それは奴と対峙すれば分かる事だ。

奴がどこにいるのかもまるで当てがないのだが、それ自体は大した問題ではないだろう。何故なら、エルクウは呼び合うのだ。

俺が奴を追い続ける限り、奴との線が切れる事はない。

そうだ。

俺も狩獵者なのだ。

そして、俺が狩るのは……同族の男。

もしかしたら、俺は奴には勝てないかも知れない。明らかに奴はあの水門の時よりも強くなっていた。

だが、俺は奴を殺さねばならない。従姉妹達の供養……とは違う。これは恐らく柏木家の血を継いだ者の宿命なのだろう。

かつて千鶴さんが俺を殺そうとした時のように、俺は奴を……殺戮を繰り返す他の狩獵者

『紅月夜』

を殺さなければいけないのだ。

そして、すべてを終えた時、俺は最後の狩猟者も殺さなければならぬだろう。

最後の狩猟者……それは、自分自身。

バッドエンド(了)

■分岐選択に移動■

『紅月夜』

.....
あとがき

『紅月夜』(こうげつや)

『痕』より、千鶴ハッピーエンド後の出来事

作品紹介

エルクウの力を覚醒させて千鶴を守った耕一は、あの後柏木家に住む事になった。

そして、ある晩の事。千鶴に「一晩一緒にいて欲しい」と言われ、期待に胸を躍らせて、彼女の部屋に行く耕一。

だが、そこで耕一が見たものは！

今、戦慄の扉が……開かれる……………。

謝辞

すばらしいゲームを提供してくれた、リーフの皆様へ深く感謝致します。

コメント

何はともあれ千鶴さんです。

『痕』の中では、彼女に殺されるシーンが一番好きです。

ところで、この話では楓が全然出てきません。と言うより、つらくて出せないのです。

楓メインの話ならいいのですが、それ以外の話で楓を出すのは、とても切ないのです。だ

から、出せません。

…楓は楓を主役とした話（まったく別の話になります）を、いつか書いてみたいと思います。

追加コメント(1999/07/27)

随分と久しぶりの改訂です。

他の創作と書式を統一する目的によるものですが、一部修正もしています。

1996/09/17 初版 a s h

1999/07/27 改訂 a s h

PDF書式変更:2016/05/12

『紅月夜』